

伊藤 國彦

「生物多様性の意義の再考を」



今年(2010年)は、生物多様性の意義を再考する絶好の年だと思います。

10月には第10回生物多様性条約締結国会議(CBD-COP10)が名古屋で開催され、それに連動して地方時自治体などでも様々な関連事業が準備されています。岡山市では今年を生物多様性元年と位置付け「岡山の人と自然展(7月10日~8月18日:デジタルミュージアム)など多様な取り組みが行われます。本ネットワークにも参加要請が届いています。

岡山県では、先般「岡山県版レッドデータブック(2009)」を公表し(県のHPで閲覧可能)、ダイジェスト版も準備中です。

伊藤 國彦 氏

1945年生まれ。岡山県立大学名誉教授。絶滅危惧種ウスイロヒョウモントキを中心に県内昆虫相を調査している。日本鱗翅学会自然保護委員会中国地区委員長。(財)おかやま環境ネットワーク評議員。

IPCC 予測やゴアレポートに触発され、最近「環境」「エコ」「温暖化」などの言葉が今までになく多用されていると思います。

それだけ、環境問題への関心が高まっているのだと思えば良いのですが、私には若干気になる事があります。

ブーム的でイベント的でファッション的な取り組みやキャッチフレーズが多すぎると思います。

環境問題の優先順位が「温暖化対策(CO2やエネルギー問題)」と「個人の生活スタイル」の見直しなどに集中しすぎだとも思います。

個人的には、最重要課題は生物多様性の保全だと思います。前述のように「生物多様性」という言葉も今年は特に多用されていますが何故多様性が大切かについては私にも良く理解できていませんが、それでもそう感じます。他の問題と異なり、生物多様性の崩壊は私たちの生活や命や健康に直接的には影響があるように思えませんし、すぐに見えませんが、また、これほどの規模と急激な変化は多分今までに人類が経験したことだと思います。

多様性の崩壊は何をもたらすのか、ほとんど予想できない所に本当の怖さを感じてしまうのは、私だけでしょうか。

昨年、日本鱗翅学会主催で「日本産チョウ類の衰亡と保護」に関するシンポジウムが開催され、「中国地方のチョウ類の現状」について報告しました。その準備の過程で、中国5県の状況を調査しましたが、中国地方に生息しているチョウ類の約40%が県別RDBに記載されている事がわかりました。岡山県でも数種は、近々絶滅と認定せざるを得ないと思います。

そのことが、私たちの生活にどう関わるのか、良く分かりませんが自然界からの重要な警鐘である事は確かだと思います。

飛んでいるジェット機から小さなビスが少し抜け落ちて、とりあえず問題ないのかもしれませんが、気づかず、あるいは無視するとどうなるのかは予測できると思います。今年もチョウの保全と調査に関与しながら、生物多様性の意義について再考したいと思います。